

テラ紀行（昭和五十一年）

二年 稲賀 繁 美

三月十三日

ナクソス島を出航してしばらくすると、夕日が左舷から船室に射し込む。日の光に深く影を刻まれた女の子の顔はなんとも魅力的だ。シャッターを切る。

午後六時半イオス島着。あたりは紺一色で黒い島影の中腹にかすかに白く教会のドームが見える。スクーナーが独りもやっているその燈があたたかい。

ティラに着いたのは午後九時であった。ピレウスより約十二時間。「ナクソス」という名の、我々を運んだフェリーは、今夜はここに泊り、明朝ピレウスに向う。甲板に出ると正面は、巨大な星をちりばめた暗幕であった。星がこんなに大きかったらうか。しばらくはんやりとみとれてそう思う。それは二百メートルの高さを持つ岩壁に点々とともる電燈だったのだが。

はしけで別の港に行くという。長さ数メートルの屋根もない焼

き玉舟に全員乗せられる。今まで大きな船に乗っていたものだから、世界のはてにでも来たようだ。焼き玉の振動に身をふるわせながら、なぜかあたりは静まりかえっている。左手に厩をなした黒い岩壁。満月に近い明るい月が雲を照らしつつ流れて行く。そのかげをうつす海の水はあたたかい。佐藤春夫の小説を思い出す。はしけをおりて、タクシーで岩壁を登る。五、六度折り返して登り切ると、次はカーブの連続である。自ずと心の高ぶるところにもってきて両側に女の子が座っているものだから妙な気分になるのもいたしかたない。のっぺらぼうの土地が黒く広がっている。そのはるか先にやや小高い城の如き丘が見えるかと思うと、左右にかすめ去る。しかしそちらに近づきつつあるようだ。

予定の宿がしまっているとかで、もう一件のに泊ることになる。(といってこの島には宿は二軒しかない)よくこれでB^{ベータ}クラスの料金がとれるものだと思うぐらいめちやくちやなところである。二人部屋とてたしかにベッドは二つあるが、大きさも高さも大人用と子供用ぐらい違う。電灯はつかぬ、鍵は、泥棒は居ないというから良いが、役に立たず、湯は出ず、便所の水の流し方はわかるまでに二十分も要す。ヒーターはぶっこわれて、おばあさま方は寒い寒いを連発。宿の主人は、ニコニコしてよくわからぬ英語で答えるが、結局は何一つ改善されぬ。若い者にはその方が夢があつて良いのだが。後で聞くと、この宿の主人は「大悪党」だとか。

十四日

朝食はいわゆるギリシア風のもの。村田数之亮先生などは、これをお楽しみにして居られるそうだが。まっ白なバター、これにはこのあたりのチーズの如きくさみはない。それからちみつ。しつこいぐらいねっとりしている。お茶か「ネスカフェ」か、と聞く。ここではコーヒーとはグリークコーヒーのどろっとした甘いのを指し、それ以外の普通のコーヒーは全て「ネスカフェ」である。ふつうの(ふくらし粉の入った)パンと、とうもろこしで作るというカステラ、いずれも宿で焼いたものである。

朝起きて、窓をあけた時の戦慄と感激は一生忘れまい。町のまん中の通りに面したホテルに泊ったのだから、大した風景など期待せずに窓をあけたのだが、高所恐怖症の私は思わず身ぶるいした。下がない、というか、二百メートル下の水面がすぐに広がっているのである。本島が左右に大きく腕を広げ、その先にテラシアが横に伸びる。その内環の内に、低く、どす黒い、火口を持つ島、ミクラ・カイメニとパレア・カイメニが、ここからは一つにつながって望まれる。阿蘇を見る時の戦慄はない。穏やかな海水が、その荒ら荒らしい部分をおおい隠しているからだろうか、約十キロの直径を持つカルデラにしては信じられぬぐらい平和であり、穏やかであり、なおかつ壮大な、包み込まれるような景色が、視野いっぱいに広がっている。(下手な文章)

町の北の方に小さな博物館がある。宿の前の小さな通りを北へ

数十メートル歩くだけのことだが、この町はどうなっているのだろう。他人の家の二階を歩いているのか、公道を歩いているのかとんとわからぬ。博物館にはこれといって見るべきものもない。

全てアテネで同様のものを見ることが出来る。古典期のテラより発掘されたものが主で、クレータのものから、ローマにまで至る。

白一色の町である。春先のこととて、岩壁の中腹は青々としているが、真夏になれば、光と影、白と黒の強烈な対照の世界であろう。宿の主人は、白と黒しか使わぬ油絵を何枚も食堂に飾っている。三十センチもある、厚くできた白ペンキの壁の家が、一軒一軒の境もないまま斜面に建てこんでいる。階段を下れば、他人の家のバルコニーにも出るわけである。

宿と向いあつて正教のま新しい白亜の教会がある。巨大なドームと廻廊、すみにある鐘楼がモスクを思わせる。日に照らされるつまぶしい。安っぽい白ペンキがギリシアの光の下ではどうしてこのように高貴に輝かしいのか。教会のかたわらで、ミサの声を聞きながら、三十才ばかりの御者とロバの契約をする。ギリシア語のできる者がこちらには居ぬし、赤ら顔のひげもじゃおじさんもとて英語をしゃべつてるとは言えぬから苦労する。

午後古代期のテラへ行く。若者はロバ、老人連はハイヤー。宿を出るとき、緑色のバキューム・カーが宿の屋上のタンクへ給水していた。我々の仲間はみんな顔をしかめる。習慣はおそろしい。臭くもないのに臭いような気がするのだから。ホースが穴だらけで、

宿の中庭は水びたし、宿の中の連中はてっきり大雨とまちがえる。

古代期のテラ。海拔は五百メートル近い。こんな高地で、これだけの規模の町に充分に水を給し得たのか。食糧はどのようにして運んだのか。ガイドブックとてらしあわせての同定に二時間を費す。御老人方には特に、自動車の運ちゃんも、自動車も（一台エンジンがいかれてしまった）、ロバ君達も、御苦労なことであつた。三浦一郎先生は、大変に風が強く寒くて寒い所だとおっしゃっていたが、この日は快晴、全員汗だくである。端の方の神殿跡からは三方が海へと落ちて見晴しが良い。左手はるかには成田空港よろしくいつまでたっても未完成の飛行場の白い滑走路が、点々と四角形に広がる畑の間を斜にぬけ、海岸線の波が海の青さにまぶしい。右手はもやにかすんで、白い家々と緑の畑。これなら海賊の来襲もすぐにわかるというものである。強い光と涼風の中、町で買ってきたオレンジがうまい。

夕刻、同室の男と島の横断を試る。ユーカリの並木道をフィラの町から東方へゆるやかに下る。第一の目標はカルテラドスという集落である。そこまで行けば海岸はすぐだろう。地図を持たぬ我々はそう思っていた。この集落もフィラの町と同じように白壁の町である。中ほどにペンキで華美なほどの色彩がほどこされた、この集落には不つりあいなほど大きな教会、そのまわりに、数メートルもまっすぐではない白い坂道がうねっている。ふと道がとぎれると、例のように、他人様の家の二階の如き土地（？）を通

ることになる。子供らがボールをけている。我々に目をむけるが早いかボールをけてよこす。こつちもけり返してやる。町をぬけると、ようやく土の道。左右にうまだかロバだかラバだかが一列につながれている。海は見えなくなった。直線コースをとることにして、ぶどう畑の境に足を踏み入れる。錆びたトタンのカシがいくつもがっている。気付くと、ゆるやかな谷の底を歩いている。雨期には川になるのであろう。名も知らぬ小さな白く黄色い花が一面に咲いている。日本で言えばレンゲの原を歩いているようだ。日は西に傾き、谷に深い影を作る。ようやくうち寄せる波の音をかすかに聞いた時、もう五時を回っていた。海までは、まだ一キロ以上ありそうだ。戻るには二時間近くかかる。二人は戻ることにした。おそろしさを覚えるほど静かで広い。時間が許すなら横になりたい。しかし日は既に低く、東に下ったこの土地は今にも闇に支配されそうである。

背後からろばの集団が追いついてきた。少年とその父らしき人犬が一匹、しきりに追いたてている。家に戻るころなのであろう。少年は裸ロバに乗っている。しばらくこちらを見ていたが、ロバから降りて、こちらに来て、何やら言って手をひく。乗れ、ということだろう。金をとるに決っている。セリョールという言葉。英語(?)で一人三十ドラクマだと言う。あたり前な額。それでもとまどっている。彼も何度かあきらめて、あとからついてきたりもする。しかし目が合うと、またすすめる。親父さんに声

をかける。二人で何かしゃべっていたが、親父さんが近づいて来る。やっぱり一人三十ドラクマだという。まあ良からう。商売上手なこと。

自分を指して、ネロ、という、親父さんの呼ぶのから考えて、その子の名らしい。犬を指してピーターという。そのうちに、私の乗っているロバの尻にとびのる。裸だから股が裂けそうである。ロバの背中はこのなかにトンがっているのか。坂道にかかったとき後ろにひっくり返りそうになった。少年は、ロバをしかたたりいなししたりして、上手に進めて行く。鞭を振らねばロバは決して言うことを聞かぬ。ドイツ人か、と尋ねる。うんにゃ日本人。ヤポナージュ(?)と驚いた顔をしてみせる。胸のポケットのボールペンを見つけて、くれと言う。良いよ。でもすぐ書けなくなるぞ。

先ほどの教会の横でロバを停める。ア・ミニュートウ、ア・ミニュートウと言う。ちょっと待ってて。手帳を貸して。ポートウ、ポートウ、写真か、少し暗いが撮ってみるか。近所の人にヤポナージュがどうのこうのと言って回る。十人ばかりがまわりに集まってきた。やがて家の中からワゾを一杯と水を一杯盆に入れて持ってきてくれる。急に喉の乾きに気付く。このアブサンの如き酒うまかったのは後にも先にもこれ一回である。エフカリスト、知っている唯一の言葉で礼を言う。

「*παπακαλὼς χαυδὲ, χαυδὲ!*」
パカロ カイレ カイレ、
坂道をしばらく行くと、例のユーカリの並木道。フィラまでは一キロほどである。歩くよりのろまなロバにゆられて町に戻った

のは七時前であつた。少年はちゃんとチップを要求した。あいにくと小銭がない。彼は日本の金には目もくれぬ。一ドラクマと一ドルの違いぐらい知っているのに知らぬふりを装う。会話が信用できるなら先方だつて御年十二である。しかしまんまとロバに乗せられた我々などしょせん彼の敵ではない。まんまと五ドル紙幣をかつさらわれた。悪い気はしないが、あんまり観光地にもなつてはしくないものである。写真を、わかつたよ、^{エフカリスト}、^{exhibition}、写真、相当な悪条件ではあつたが、白黒だつたのでなんとか映っていた。彼の、我々にはほとんどわからぬ字で書かれたあて名を航空便にはりつけて、投函してはみたものの、果して無事に着いたものやら。

十五日

交渉に手間取つたが午後アクロティリ行きと決定。今回の旅行の眼目の一つである。ガイドブックにはまだ記事がないから、急いで先生の持つていらつしやる発掘報告を読み、プランを模写する。サントリーニ火山への関心の集中、およびアクロティリ発掘の経緯をここに述べる必要はあるまい。アテネの国民考古学博物館の三階に特別陳列されていた、保存状態の非常に良い壁画およびその他の出土品がここから近年発掘されたのである。

現場は作業用のバラックの屋根に保護されており、おりからの雨のため決して明るくない。マリナトスの死と政変の為、発掘中途で放置されている。内海と外海の望める低地は本島でもここだ

けである。フィラの町から車で約一時間。住居の跡は、二本の細い通りを中心に、互いに壁を共有した多くの部屋のかたまりと、独立した三個の建物まで発掘されている。壁の厚さ、質感は今の町並とかわらない。木材を骨にして、石を積む方法はクレタの宮殿と同じである。クノッソスにあるような牛の角の如き石が屋根の一部に残っている。地図をたよりに、壁画の発掘された部屋を同定して行く。地震で崩れた跡のはっきりわかる石の階段、放置されたつぼ。大量の壁画を持つ「西の家」の作る通りの一角は、昨日通つたカルテラダスの通りといくらも違わない。むしろ壁画を失つた我々の方が貧しいのではあるまいか、むしろこの地が宮殿なのか否かが明確にならねば何とも言えぬが。通りの上に、別の通りが立体交叉しているのも今のフィラの町と変わりない。マリナトスが墜ちた所には花束がそなえられていた。

夕方には雨もあがりすばらしい夕映えとなつた。フィラの町全体が淡いピンク色にいろどられ紫の海にてりはえる。テイラシアの彼方に、太陽はゆつくりと沈んで行つた。

あすは休日。我々若い連中は、ドメステイカ（地酒のブドウ酒）を囲んで夜を明かした。

十六日

雨に洗われて、空気は澄んでいた。岩壁の緑もいかにも春を思わせて鮮かに目を射る。

今日は内島にピクニックである。通称マリナトス通りという、

町から港までのつづら折りの道を、あるものは歩き、あるものはロバにゆられて下る。約二千段の階段。さすがにロバの方が速い。

内島までは例のボンボン舟で三十分。溶岩が固まってできた玄武岩質の火山岩のごろごろしたかたまりがこの島の正体である。

噴火が新しいためまだあまり風化していない。三浦先生が、昨日来同行しているドイツ人の数学の教授に、軽石を手にとつて、日本人はこれを軽い石と言います。なぜならこれは水に浮くからです。なんぞと、実演をまじえてやっている。すりばち状の旧火口をながめながら、登るでもなく進んで行くと、小一時間ほどで、白煙をあげている火口に至る。斜方イオウの結晶を採取。もうすぐ壊れたが。この採取であやうく火傷を負うところであつた。岩石を取りあげると下から蒸気が噴出したのである。火口は直径五十メートルほど、深さ三十メートルばかりで、周囲で少し蒸気をあげているにすぎぬ。山頂で一休みしていると、にわかに雲が切れて快晴となった。本島の岩壁が、黒く白く、又北の方は赤く照りはえ、フィラの町が緑の中で白く輝いて美しい。海も急に澄んで深い色調をみせる。テラシアや、さらに一島孤立して外輪をなすアスプロニシにはつきりと地層が刻まれて、特有の陰影を作る。岩は日光を反射してすぐに焼ける。暑いが汗はかかぬ。空気が乾いているためか。時間の過ぎるのを忘れて、しばしまどろむ。上空に一直線の雲。クレタへ向う飛行機の跡だ。山頂特有の涼風と強い日ざし。喉が乾けばちゃんとオレンジがある。オレンジの

うまさは口では言えぬ。腹がへれば朝食の時にかつさらったパンがある。少々硬いが、その方がかえって食べた気がするというものだ。

十七日

昨日の夜フィラの町から「ナクソス」を見た。さすがに大きな船だ。宝石のように、眼下にきらめいていた。今そのナクソスが、汽笛を鳴らし、港が少しづつ遠ざかつて行く。到着の夜、目の前にあつた星をちりばめた暗闇は、今は緑と赤の岩壁である。中央に黒々とした火山灰の層、文字通り縫うように左右に走るマリナトス通りの白いつづらおりをのぼりつめると、白いフィラの町が朝もやの中からこちらを見おろしている。フィラの町の北のはずれの丘が、右手はるか上の方を通りすぎて行く。昨日の午後、みんなで歌をうたいながら、あそこで日の沈むのをぼんやりと眺めていた。「新世界より」のあの一節が自ずとくちびるから漏れていた。それはいつしか中学の時代の夏休みの山のキャンプファイアの思い出と連なっていた。あの頃には、自分もネロのような澄んだ目をしていただろうか。またいつか、この島でネロに会う日があるのだろうか。

＊ ＊ ＊

今春、さる人に紹介されて、それまでギリシアなど無視していた私は、突然ギリシアへ旅行した。上智大学で、三浦一郎先生が中心となって企画されたものに、運よく参加できたわけである。

三週間余の旅で、三十万円ほどの出費であるから——もっともその金は全てスネカジリという非常にケシカラぬ、そして、大いに感謝すべき状態なのだが——比較的には、大へん安価であった。

それまで高校の教科書以上の知識は全く持ちあわせていなかったから、結局旅団中終始最も無知な男としてすごしたわけである。

他の連中は多く古代史を専攻してて、ギリシア語だってけっこう読めるような連中ばかりだから。みんな英語も私よりうまいし……。

無知を自認しておいて本も読まぬから、状況は今回のゼミでもひとつも変わらない。しかたないからこれでレポートのかわりとさせていただきたい。決して読める文章および字だとは自分でも思っていないけれど。

＊ ＊ ＊

以上は自分の属していたゼミに出す予定だった蛇足リポートである。結局日の目を見なかったので、こちらに転用する。自分の文才なきところを悲しむ所以である。

この旅行、行く事にした理由の一つに、春合宿がサボれるかも知れぬ、という希望のあったのは、深層心理をも分析すれば否定できぬ。そしてそれは現実となった。喜ぶべきか悲しむべきか。ともあれ、この旅を分かち合えず量を嘗めさせられていた仲間、何らかの形で、旅行記を示す義務を感じたわけ。

それにしてもオレンジの安いこと、うまいこと。オレンジをほうばる度に、合宿中まずいミカンに涙を流して狂喜している我が

仲間の事が脳裏をかすめるのであった。

まれにみる美人ぞろいの女性軍であったが、若干人数が少なく、アブれた同室の男と私は三週間の間イジイジといかがわしい関係を保って互になぐさめあったのであった。

(前駒場副将)

心・気・道

二年 稲賀 繁美

(一) だれしも文章を書くのを好まない。例年の赤門がそれを如実に物語っているようである。

去年、新入生の為の部の紹介文を書かされた。プラトンに凝っていた。というより、成就されぬ恋にプラトニックな夢想を抱いていた、と申し上げた方が正確かもしれぬが、そんな筆者は、ざっと次のような事を述べた。

まず大学とは真理探究の場である。諸君は真理探究に日々努めるべく大学で学習する。しかるに人間頭で習い覚えた事はどうもすぐに忘れるものとみえる。一方水泳にその端的な例を見る如く、体で覚えた事柄は半永久的に自分のものである。しかば諸君、人間、事学習に関する限り、体でぶつかる学習の方がより根元的なものはあるまいか。しかば、真理追求もアタ

マでばかり行なう法はない、体で真理を体得せずして、何の大学か。

この西洋かぶれの耶蘇教徒め、という声が聞こえて来そうである。それ以外にも容易に反論され得る弱点を多く持っているのは自分でも心得ている。若干弁解めくが、以下これを種に感想をつつてみようと思う。

合気をやれば、真理という言葉のアサハカさがわかるよ、という逆説的な意味を込めてみたのは事実である。むしろこの真理なるもの、プラトーンあたりから、キリスト教の影響なんぞも蒙りつつ作られてきた概念の日本語訳を指す。こういった地に足の着いてない議論の場では、今の連中は、小学校以来何となく入って来た、「西洋的真理」を念頭に置いて、ものを考える、と思われたからである。日本古来の、意識の底に沈んでいる日本人の意味での真理は、今や眼前にその姿を現わしてはいくれない。むしろ、合気をやれば、それがわかるよ、というのは、西洋一辺倒から少しは日本人としての自覚が得られるようになる程度で、そんな底辺に潜んでいるものが、筆者にとって、啓示の如くあらわれたわけではもちろんない。だいたい啓示というのも、インド・ゲルマンの神秘主義から生じてきた概念で、この神秘主義たるや、いや、やめておこう。

だいたい（またしても）その探求方法にしてみたところで同じではないか。西洋の世界の中では哲学と科学を相對峙して見

做すのも、哲学と歴史を、はたまた歴史と科学を対立概念としてみなすことも意味があろう。しかし、そんな科学的認識方法と、それを自分勝手に利用した「文明」なるものに支配された世界の他の部分にとって、そんなものは笑止である。どだい限られた範囲しか見ることができず、それを視ると称したところで、それすら不完全な人間によって科学的に立証された法則なるものに普遍性があるなどと信じること自体、愚の骨頂である。西洋の科学、哲学にはたよらぬ、ではインドは——今の印哲に何ができる。ドイツ語ができねば何も言えない印哲で。それではシナは。最近、シノロジーが欧米で盛んなのは、この最後の砦を、その偏った科学的認識で分析し崩そうとの野望なのか。シナというと、人は一度は老荘の虜となる。その瞬間、まさに身の毛のよだつ思いが全身を走る。今まで十何年の短かい人生経験の中で、しかしこつこつと蓄えていった西洋の学問がその根底から、まさに地響きをたてて崩れ去るからである。真理を求めて何になる。何か新しい事がわかったって、それが一体何になるんだ。思い余って、人はどこをどうまちがえたか、誰かのように、華嚴の滝にとびこんでみたり、エトナの山の火口の中に身を隠したりもする。さあらずとも、一週間位は学校に行く気もなくなくなるものである。人間やっぱり何か柱が必要だ、というのは、社会学の研究を待たずとも明らかである。逆説の裏には、そんな時に合気をやっていると、もうしばらくは生きてこ

の世に在ることも可能かもしれませんよ、という穿った意見も隠されている。しかしそれは運動系サークル全てあてはまるつ

ところで、人間何かたよるものがないと、生きて行けぬ、というようなことが、立証されたところで、そんな知識を万人が持っても、別にそれで世の中住みやすくなるわけでも何でもない。ちょうど講義を先生が真面目にやれば学生は居眠りをして、覚えてる事といえ、先生の冗談だけ、といったもので、プラトーンが説いた理想国の図なんでも、そのあたりを、わかっていても黙っていれば良いものを、ズケズケと書くもんだから、世の「民主主義者」の反感を買うことになる。

民主主義（という訳語自体、概念の範囲が不明確でしばしば物議をかます）というのが又けしからぬ。風土も何も違った所に、あたかもこれが普遍性を持ったものであるが如くに押しつける野蛮さは許し難い。かく言う私も国字改革なる悪政の下に教育を受け、漢文はおろか、日本民族の伝統ある筆記法すら体得しそこなったのであり、島田先生の名文を読ませていただくたびにその事を深く恥じ入るのである。日本も西欧も理解できぬ自分を。

つまるところ、日本にとっての真理を探らねばならぬ、と仮定すると、少なくとも、その方法として、西洋の方法のみを運用して事足れりとするのは誤りであり、かえて、西洋の方法を用いる事自体に、真の日本を求め得ない原因があるので

あるまいか。この探求は、従っておのずと西洋流の探求方法とは別なる方法論を作る。その点で、今、「仮定すると」と慎重に断った文句も不要になる。というのも譬え老荘の如き立場から見たとしても、この探求方法は、むなしくないからである。すなわち、少なくとも老子にせよ莊子にせよ、自ら死を選ぶことはなかった。ただし、これは方法の問題であって、結果としての死はこの場では考えない。

では西洋の考え方と根本的に違うのはどこであろう。最近のコトダマ論が盛んである。コトバにはタマシヒが宿る、と見て良いであろう。それ以上は不勉強にして知らぬ。西洋は、自らの源であると自称するモノに曰く、はじめに *kosmos* ありきと称す。英語の如きキタナイ言語は別にして、インド・ゲルマンでは行間を読む、という姿勢は意味を持たない。それはコトバに魂が宿る、と見えぬからではあるまいか。たしかにあちらの文章が解せぬ場合に、易経に注をつけるような事をやっては、「理解」から遠のくばかりだ。あちらさんはこっちの姿勢をアニミズムだと攻撃するかもしれぬ。もともと絶対神の信仰だつて、自前のものではないくせに。国語学や言語学に全く疎い筆者の右記の説には正しい部分は少ないかもしれぬ。しかし根底はこのあたりにありそうだ。

日本文化論が盛んである。「日本」という文句が冒頭につく本ばかりが書店の棚に並ぶこと自体何らの不思議もない。否、

日本人による西欧その他の研究が仮に意味を持つとするならば、それは、日本人としての魂のあり方および、そこから導かれる諸学における独自の視座の設定が行なわれるからであろう。西洋流の分類に基づく学問探求の中で、多くの成果が上っているそれは、つまるところ、西洋（とのみ言えるか否かわからぬが）の目ざした、自らの独自性と、自らの普遍性を立証しようとする試みの日本版に他なるまい。本当に我々の求めているものが普遍性を主張し得るか今はわからぬ。また我々にとってあたり前なことが彼らにとっては全く不可能であったりもするのである。ただ日本人の魂の形成の上で、大きな変動であったいわゆる日本の近代化以後の歴史について、我々は豊かな史料を持ち、今や、比較的つきはなした立場でそれらを眺めることができる。性急な西欧化がもたらした最大の問題の一つに個と全体の問題があろう。形成されたのは日本の伝統とも西欧の伝統とも相容れぬ代物である。何がこのようなものを形成せしめたのか、それは社会制度や為政者の恣意に帰着せしめるべき問題ではない。我々の先代の、そしておそらくは我々の内にも宿っているであろう心のありようと、その動きを見て学ばねばならぬ。ココロ、という日本語を大切にしたい。これは決して翻訳できる言葉ではない。いみじくもラフカディオ・ハーンが喝破した通りである。もし普遍性を見出そうとするならば、極力独断を排して耳を傾け、言うべき事を相手の土俵の上で堂々と言わねばならぬ。

これだけ日本論が盛んな今、新渡戸稲造の如く正鶴を得た日本の道を、しかも情熱と雄弁とをもって語れる者が果して居るだろうか。

単純な復古論、現代日本への投げやりな失望論はもうたくさんである。今こそ我らの魂、そしてその魂のあり方を明らかにせねばならぬ。そのための準備は既に充分だと思われる。研究の成果をまとめあげるだけのココロ、その働らきとしての気のあり方を自らの内にしっかりとくためて、自らの生きる道を見定める心的な糧として、進んで行きたく思う。（文章中で勝手にお名前を借用いたしました事を島田先生にお詫び申し上げます）。

(二) 西洋の認識方法にずいぶんケチをつけた。それは真理を絶対の基準として、価値として見做し、その下に世界を構築する。今、真理それ自体が価値たりうるのか、又、西洋の真理なるものは、普遍的真理といえるのか、さらに、西洋で、実際に真理なるものが絶対の価値基準としての他位を与えられているのか、といった問題は省略しよう。方法論を再びとりあげる。

西洋の方法論は、つまるところ、分析と帰納ではあるまいか。それも、全て分析が時刻的に第一に要求される条件であり、これを大きな特徴として掲げることができる。

この際、分析対象が有限なこと、分析結果としての法則の実例への演繹吟味もまた有限なこと、さらにこれらの行動主体た

る人間が有限な能力を持つのは言を待たぬしそこから自ずと導かれる結果を今さら繰り返そうとも思わない。そして、分析して何かがわかつて、それ即ち解決ではないのであった。

* * *

大切な事は知識という結果を得ることではない。知識を得てもそれでものごと改善されるわけではない。問題なのは人生きざまなのであり、何物かを求める過程である。

何者かを求める。これには大きく二つの方向が認められる。

上へむくか、下にむくか。この区分はもとより感覚的なものである。しかし、実際に多くの人の活動を見ると、この感覚の差が実に明確に認められる。今その例をあげることがせぬが、上へといってみると、そこには上位者からの啓示が予感され、目的が理想化されるに従って、上位者は絶対者となる。下へ求めるものといえば、自らの底にある根に他ならぬ、自分の底辺に潜んでいる、土着性、自分を自分たらしめているその本源なるものである。このように表現してみると、前者が太陽の如く白い、そして後者が肥沃な土壌の如く黒々としたイメージを形成してくるのを否定できない。

この黒と白を一つのものに結合させる試みはプラトーン以来何度となく行なわれた。プラトーンによれば、イデアへの憧憬、白を求めることは、又同時に自分自身を想起する―思い出す―事、つまり、黒々としたものの本源をみいだすことであつた。

なるほどすぐれた説明である。しかし、多くの文字をみるとき、この男は白い作家だ、この男は黒い作家だ、はたまた、この男は白くなったり黒くなったりはつきりせん、というような気には良くなるし、時によつては、黒にも白にもならず、ピンクとブルーの間ばかり往復している事もある。また時たま両者がなんとか共存している作品をみつけても、せいぜいくすんだ灰色で、白いまばゆい輝きと明るさも、はたまた黒々とした豊かさ、これらどちらの良い面をも相殺されたものしか見いだせぬのである。たしかに観念的にくつついたものはある。西洋のものは多く日本人には理知的すぎるから、そういった意味で、ココロからどつぷりと浸かることはできないけれど、少なくともアタマでだけは、この理想の実現を見る。先にあげたプラトーン以下、他に絵画ではルオーに、そして、ゴーギャンに。音楽は今を考えぬ。音楽は全く別なものではないか、という気が強くするからである。もっぱら白に指向するアウグスティヌスのような男（)が、音楽を危険視する。ニーチェを今さらに上げるまでもなからう。

問題は日本に於て、である。日本人の心にびたりとくる形で、この白と黒をうまく調和させ、高めることはできないか。既にそれは厳然として存在しているとおっしゃる方もあろう。筆者個人はまだそれを見いだせぬ。

藝道の究極は全て一通じるといふ。しかるに二兎追う者は、

とも言う。我々入門者、初心者、究極からほど遠いのであるから、二兎を追うべきではない。一つの道に精進して、修業を積むにつれて、他の道もおのずと我に等しきと観ぜられるに至るのであらう。

これは恐ろしい推論である。このことを強調すれば、学問と運動部の活動の両立を努めようとする方向自体、求道者として大成せぬあり方だ、という結論を導くからである。もっとも今の大学なり何なりの学問は道を修める意味から言えば学問とは言えぬのかもしれない。とすれば尚一層、大学の学生として、合気道を稽古するのは、それ自体矛盾だと言えるのではなからうか。

今の学生は、一つのものごとに打ち込む力がなくなってきた。適当に学校に行き、適当に勉強し、要領よく立ち居振舞って、平穩無事に世を渡ろうとする。東大の学生には特にその傾向が強いという。一種の世紀病でもあらう。今の時代に明治の若々しさはない。しかし、もう二十年早く生まれていれば、といった感慨は百害あって一利なしである。

道は自ら開かねばならぬ。努力せねば向上はなく、努力は抵抗を感じたればこそ実感されるものだからである。しかし、今日のように、全体が腐りかけてはいても、それなりにおどましく完全性を持っている殻をつき破るには、一点に力を集める他なさそうである。分析は自己を滅ぼすのだろうか。単純になる

即ち雑念を払うことなのか。今我々のかまけている学問は、するとやはり雑念の一つなのか。否、このように思い悩む地平にのみ自らの思考を展開するゆえに、八方に手を出すような事態となり、壁を破れぬのである。上を指向するのによい、下を指向するのによい。理想の地平を求めて飛翔するも良く、自らの立つ地面により深く根をさぐるのによい、今の地平に立っているよりは。そして、でき得べくんば、飛翔しつつ根をはり得る道を見いだし、その道に自らの持てる力を集中してみよう。それでも壁は破れぬかも知れぬが。

ところが妙なもので、最近のように「新宗教」のはやる時代は、それに盲目になって、常軌を逸する者が少なくない。考えるに、常軌とは社会であり、逸するとは、根付いていない状態を指すのではあるまいか。理想に夢中なあまり、狭小になっている。とすると、上、白はまた一点から降り注ぐ光であり下、黒は、無限の大きさを秘めた大地にも譬え得よう。でき得べくんばなどと呑気なことは言っておられない。学校の勉強がいかに道はずれ、道を惑わすものであるうとも、それは我々の立っている大地の表面の一部ではあるはずなのだ。それを否定するのは空中楼阁を築かんとするに等しい。

* * *

人間の推論などあてにならぬ。真実を求めつつ、遂に自ら期待するものの出現を祈って終まぬ心情より自由になること値わ

ぬ。学問を捨てて武道にはげまねばならぬという結論に自ら恐れをなして妥協案を出すに至ったが、明らかに妥協である。黄金の中庸なぞとエラそうな事は言えぬ。しかし、革新が、破壊ではなく建設である以上、観念的な自己否定はあり得ても、既存の質料を否定し去るは当らない。

逆説的だが、そうした、自己の意思に反して出現したものが、真理ではないかと思われるのである。具体的に言うならば（おこがましい限りであるが、）なんとか合気道というものに、相対的な価値あるいはそれ以下のものを与えようとした（それは練習がキツいからであり、又それ以上に、田中先生、稲葉先生の指導をかたて、まに受ける態度は非常に失礼ではないか、暇があったら道場に行くという態度は、逃避とか、虚偽とか言う前に、真摯な生き方をされている人格への侮辱ではないか、武道を人生の道と考えている方の指導を、レクリエーションとか、おもしろい、やってみたい、といったたまじめな態度で受けることは、と思ったゆえに、そのような態度を持つ限り合気道とは縁を切るべきではないのかと考えたからであるが）。このように推論してきた結果は、合気を捨てるべきだ、という筆者の意思に反して、勉強をすてるとも（この部分は最後の必死のこじつけの妥協案で撤回されたにしろ）合気を捨てる事は、一番最初の日本人としての心を求めるという前提を否定せぬ限り、全く無意味である、となってしまうのである。合気道とは日

本の古、武、道、の集大成であるという。日本のものであり、その土着の黒々としたものを全てうけ継いでいるのであり、その集大成は、白い輝きを持って、はるか上空に位置しているであらう。実感として、このような把え方は一生かかっても出来ぬやもしれぬが、理屈だけから言う、悲しいかな、抗う事は許されぬのである。

しかししかし悩むのである。これは強者の理論ではあるまいか、と。無論一生かかって目的を達し得ぬを厭おうとは考えぬ。しかし、人間やりたい事に一生をかけるのだと、せめて若い間だけでも思いたい。体力はないし、技量はないし、根性はないし、酒は弱いし、顔は悪いし、そんな自分だからこそ、せめてやりたい事をやってみたいのである。

* * *

(三) まだ「合」について考えていない。合について一番てっとりばやく、考えるべき課題を提出してくれるのは、具体的な部の活動および、部の構成員を寄りどころとする活動であらう。これについては、今までの赤門にも、社会システム論にのっとった分析がなされているので、別の話をしてみる。

中・高を通じて柔道部に籍をおいた。学校を欠席した時以外は一度も練習を休まなかった（今とは大違いである）。というのも、実は高一の時に同学年ではただ一人の存在になり、いやおうなく主将にされることになってしまつて、休むに休めなかったの

である。部といっても活動は学校の規則で週に二度。これでは強くなるはずもない。もっとも皆高一で初段はとっていたが。天性マレなる神経の欠如と体力の欠如とを誇る私は、しかしついに白帯のママの主将であった。

主将が白帯だろうが、二段だろうが、かまわぬ。問題は統率力、指導力である。しかしこっちもいだけなかった。まず同級生が全員やめてしまった事（実はこの中に、一番うまかった男が合気道の方をやりたいたので時間が重なるからヤメルなんぞと言ひ、その男に合気のわざ―何だったかさっぱりわからぬが―をかけられてヒドク痛い思いをしたのも、今合気をやってる理由の一つなのだが）の上に、この下の学年がわずか三名―それがまたまた減少して行き、ついて零名となった―という事実をあげればそれ以上何も言う要あるまい（この中には中三で初段をとった男がいる。これは今の京大空手部主将の弟で、内股の名人、兄弟そろってオソロシかった）。実力の差がなかったから、二つ下の学年の連中ともウマが合った。これだけが救いである。そして実は高二の時にはこの連中とやって負けてばかりいたのだ。なにしろきれいに一本きめた事なぞ六年間を通じて、十度となかったのである。幸か不幸か部員不足で試合にはあまり出場しなかった。上級生は強かった（当然だ）。今東大柔道部にいる松田さん以下、これも今アメリカやってる石田さん。このへんにひきずりまわされ、押えこまれているだけが高一まで

の練習であった。アア落ちル死ヌウタスケテクレエ……

お前は柔道部衰退始末記を書かにゃいかんのうーとも言われた。なにしろ高校の部員は一人、中学の連中とあわせても三十人足らずのクラブになり下がらした張本人である。そればかりか乱取りで彼がかりうじて勝をおさめるのは中一相手の時のみである。夏合宿ともなれば、一日ゲーゲー吐いて食餌全くとれず寝込んでいるのはこの白帯の主将ただ一人。―まちがってこんな人を大学の運動部の主将にはしたくありません―（合気評論家岡本氏談）

指導教員の怒りは遂に爆発した。彼は部を解散せしめたのである―衰退始末記どころのサワギではない。新たに柔道部を創立せんとする者は月曜日午前八時までにその旨口頭で本官に伝えよ―これ幸いと無視した。

ところが、である。高三も末になると、下級生がニコニコしてこんど追出し会やります、という。人間なんて良い加減なもので、追い出した先生が追い出された生徒をホメる、飛び出したハズの生徒が平気な顔をして会に出席する。ああ嫌だ、欺瞞だ。虚偽だ。

どうも話が多少うまく運ばなくなった。言いたいのは、どうもつきあいてやつが、ベタベタしてて、情に支配されているということ。それをうまく利用してまとめて行けるか否かは多く主将の資質に負うているということ。くだいようだが自分に

ついで言えば、恐しい先輩となり得ない自分の限界をつくづく感じる、ということ。すなわち、誰が読んでもオモシロくもない失敗談を繰り返すの如く述べるしか能がないくせして、どうせなんとなく四年たったら、木剣いただいて、うまい言を言つてごまかすであろう自分が嫌だということ。四年やって良かったと言つために合気をやるのではない、行為、修業が全てである……

剣について

二年 稲賀繁美

国立博物館で「日本の武器武具」展があった。以下はその感想、ただし私の感想に非ず。

兵器と武器は違う。欧米の戦争には兵器が用いられる、彼らにとって戦いの原因は常に自分の外にあった。外敵を倒せば平和が来る、と彼らは考えた。殺戮の数量的効果が近代兵器に要求された。兵器の数量的機能の大きさが平和への指標となり、それを目して兵器は発展した。

一方日本人は戦争は人の外に非ず、自分の体中に業として存すると考えた。業を消さずして、争いは絶えぬ。しかるに業は人間存在の核である。業を消すことは死を意味する。そこで、日本人

は、業をもった人間として、彼の持つ武器そのものに平和への祈りをこめようとした。武器は魂を浄化するものでなければならぬ。相手の殺す意志が平和への祈りに変るような武器でなければならぬ。この相反するが如くみえる要素を日本刀はその内に秘める。それが日本人の武器への思想である。

欧米の最終兵器が、人類滅亡の不安をのみ生ぜしめる今、日本の最終武器たる日本刀にこめられた魂を読みとらねばならぬ。

以上綱淵謙錠氏の感想である。ここから先を書かねば救われるであろうに……。

まず欧米では古来から戦争を完全殺戮と考えていたわけではない。十七世紀以前の、それも欧州内での戦争は、支配者の政治目的達成の手段にすぎぬ。王族同志は親類同志に近い間柄なのだから、これは被支配者にとつていかに残酷なものであれ、支配者にとつては遊び、ゲームにすぎない。これは両大戦についても、欧米人同志の間では、徹底殺戮の意図がなかったのは明らかである。ただ、彼らは、黒人を、黄色人を、そしてある場合は、「ユダヤ人」を、人間とみなさなかつた。これは、兵器観以前の認識上の問題である。

次に日本人固有のものを表現するのに業という言葉を用いている。仏心、漢才、洋才は外来思想ではないか。漢才に対しては江戸以来、洋才に対しては江戸末以来の批判があるのだから、それと同系の仏心についても、日本人の心」の古層と文化の移入の關係、

という視座に立った場合、これを日本人古来の觀念として、西洋の觀念と安易に比較するには難点がある。但し、これは事實として認めない、というわけではない。論理性の弱さを指摘したのみで、武士道からも仏教の要素（仮に潜在化されたものとしても）を全く否定するのはむずかしいかもしれぬし、又特に西洋人および西洋的思考しかできぬ現代の多くの日本人にはこの説明の方がわかりやすく説得力をも持つ。

さらに民族の考え方が、西欧社会の心的分化、対立化に付随して発生したことを忘れてはならぬ。「日本人」と我々が言った場合、例えばアイヌの人々の事は我々の脳裏から消えているのであり、そのことを放置して、人種差別に抗議するが如き妙な潔白心、被害者意識は捨てるべきである。欧米人の身勝手さは、すなわち西洋化された我々自身の身勝手さである。

以上のような反論は、原文に一つの補足を加えれば不要である。すなわち、西洋の近代以後の用兵思想上の兵器について考察する場合に限れば、である。このことは、同時に、西洋は、かかる思想を生みだした源として批判されるべきではあるかもしれないが、それ自体として批判すべき対象なのではなく、むしろ、その西欧近代の現象―表面的なあらわれ―にのみ、しかも本家の西洋以上に色濃く染まっている現代の日本への自己批判こそが必要なことを明らかにする。

今、西洋のデカルト以降の思想界、および社会全般の合理主義

化を分析し批判を加えることはさしひかえるし、それ以前の西洋の根底にあるものを掘りおこして、例えばキリスト教は沙漠の宗教であり……といったことを述べようとも思わない。

今必要なのは、綱淵氏が、非常にうまいと、え（あくまでもたとえである）で語られた、日本刀の秘めた魂を、自ら日本刀に接することによって感じとり、体得することである。語ることには―コトバに信を置くことは―それがタトエとしての力しか持たぬゆえに不完全である。一方、体得することとて容易なことではない。しかし、真に普遍的な意味で、この日本刀の持つ意味を、新しい平和理念として、綱淵氏の言うように「全世界の人々に考えなおしてもらおう」ためには、仮にコトバをもってするにしろ、心から発する言葉をもってせねば不可能であろう。体得しようと努める事それ自体が、この上なく深く、この上なく困難な自己批判自己再生の稽古なのである。内に向う努力なくして、外に発せられた力は、近代物質主義に他ならぬ。新たな西欧的發展価値の押しつけである。決して受け容れられるはずはない。綱淵氏は何よりもまず、日本人自身が自らの心の内に日本刀の精神をとり戻すのを望んでおられるように感じられる。